

弾痕をなでて上野の天高し

今村博子

(「稲」三月号)

上野の旧寛永寺本坊表門には、戊辰戦争の際の彰義隊の戦いで受けた多くの銃弾痕や砲弾痕が残っています。作者はその痕を撫でさすりながら、死者を悼んだことと思います。その心には、ウクライナ情勢への憂いと哀悼の気持ちもあつたでしょう。アジア太平洋戦争の時代に少女期を生きた作者にとって、戦争は時空を超えて、心の中に深い淳となつて沈潜しています。爽やかな空の下にあつても、世界では争いが絶えず、心を乱します。